

ブナ・ホツチャレ語源考

加工部相沢悟

サケは外海から産卵のため母河川に近づくにつれ表皮には婚姻斑があらわれ、美しい銀白色から黒褐色に変色度を増し、流麗な体形も背が張り出し、口吻は曲り歯牙がするどく変形し、さらに筋肉は水分が増し蛋ばく質と脂肪は急減して利用価値の低下を来たすことは良く知られています。

これらの変化の度合によって、ブナサケとかホツチャレサケと呼称されるのも周知の通りです。

秋サケの来遊が史上空前と云われた昭和五十年頃から、ブナ・ホツチャレの利用加工が提唱され、私どもも標津・根室産のものについて利用加工上の調査試験を行い報告（昭和五十一年度釧路水試事業報告書）したところでありました。さてこの生態別の呼び名であります。さてこの生態別の呼び名であります。まず銀毛・ブナ毛・川ブナ・ホツチャレと四群の名をもち、さらにブナ毛ではその度合に応じてA・B・C・川ブナ（特に雄）もA・Bに分別され、これに大小、雌雄別という具合に相当の熟練がなければ識別が困難な程複雑なものです。

しかしこれはいかに秋サケと日本人のかかわりが強いかを物語る尺度でもあろうかと考えられます。元来日本人は米食民族であり欧米人等の肉食民族とは食構造を異にし魚食民族とさえいわれる程で米を主食とする限り魚は不可分なものであり、一魚種でもブリのように成長段階別にイナダとかハマチ等五種類の呼び名をもったのも、また近年豊漁が続くマイワシにしても方言でみれば東北・北海道ではナナツボシ、瀬戸内、高知ではヒラ・ヒラゴ、さらにラシ（浜名湖）、カブダガ（和歌山）、もちろんこの外に大きさ別の呼び名をもっています。このように日本人の食生活と強いかかわり合いをもち食文化の基盤をなしていると思われ、どうしても細かく分けこれに、一つ一つ名称をつける必要のあったことがうかがわれます。

サケも同様で春に獲れるものをトキシラズ秋に獲れるものをアキアジ、そして標準和名がシロザケと呼ばれ、この学名はオンコリンカス・ケタと呼称されています。

ットボーイはその著書、ザ・サーモンの中でこのオンコリンカスとは「曲った鼻を意味する」とあり、また同書には産卵後のサケをカナダでは、ブラック・サーモンと呼び、カムチャッカでは「短剣のような歯をもった魚」という意味のランセット・フィッシュと呼ばれていたと書いてあります。

このように魚の行動あるいは姿形、色彩等の状態から名称づけられることが多く、細かな状態観察を通じて命名されることを示しているものと思います。

さてそこでブナとホツチャレを区別することとはその性質上、利用上から分別されることは理解されますがなぜ、ブナ・ホツチャレとどうかについては漁業、加工関係者に聞いてみても、アイヌ語ではないか、いや日本語のはず、また土地の古者は昔からブナはブナ、ホツチャレはホツチャレでありそれ以上のことは判らぬ、という具合に一向に判然としません。

北海道出身の民族学者、藤本英夫氏が雑誌アニマ（平凡社・一九七七年・二月号）に投稿した、サケ文化史の中で、ブナの語意にふれ、サケが「上流にいくにつれ皮膚は暗黒色になり、ちょうどブナノキの色に似てくるので『ブナっ毛』と呼ぶ」とあり、さらに「アイヌはベテチ（川・で・煮える）」といっている。と記述されブナとはアイヌ語でなく日

本語であることを示してあります。

ブナノキは北海道ではほとんど見られませんが裏日本にはブナの原生林があるといわれこのあいだを流れる川をサケが遡上したとすれば、そのコントラストからしてイメージが一致するだろうことは容易に理解できます。私も夏のブナノキを一度だけ見たことがありますが、ブナサケの班紋とブナノキのそれは良く似ていますが色彩ではブナサケの方が赤味を呈していると感じます。しかしサケはブナノキが紅葉する時期に川に遡るもので、あるいはブナノキの肌も色づくのではないかと思われこの説が正しいのではないかと考えています。

ホッチャレについては普通「ホッチャレ(老魚)」と記述した書物が多く、あたかもホッチャレとはアイヌ語で老魚を意味するかのよう的印象づけられますが、釧路市史編さん事務局長の布施正氏によれば、元北大の犬飼教授がアイヌ民族史の一節に「ホッチャレ(日本語)」と記述してあるという。

先きの藤本氏はサケ文化史の中でホッチャレにふれ「放卵、放精を終えたものをホッチャレというが、アイヌはその状態からオイシルチエブ(尾を・物がこすった・鮭(尾のすりきた鮭))、オンネチエブ(老いた鮭)、とくにメスをチボルサク(腹子を・持たぬ)といっている」と記述してあり、犬飼教授同

様ホッチャレの語はアイヌ語でないことを明確にしています。

少々横道にそれますが、先きのサケ文化史ではメフンにもふれ桓武天皇の都(一二〇〇年前)長岡京跡から発見された「鮭背綿と書かれた木筒があり、木筒とは古代日本の役所で紙の代りに使った木札で物品を送るときに荷札にもなった」とあり「鮭背綿はアイヌ語でいうメフン(腎臓)である」としています。どうやらメフンはアイヌ語をそのまま現在も使っていることになりました。

さらに「これらは北陸地方からもたらされたもので高貴な人の贅沢な食品」であったようです。北陸地方はブナノキの多い所でさきのブナの語は北陸地方の和人が北海道にもたらしたのではないでしょうか。

さて話を元にもどし、アイヌ語でないホッチャレとはどこから来たのでしょうか。その手掛りは容易につかむことができません。

北陸地方越後に生れた鈴木牧之は天保年間(一八三〇—二二六)で出版されています(岩波文中下之巻「鮭の始終」の項に産卵の様子が書かれ、この中で土地の漁師はこの様態を「掘りつく、ざれにつくともいふ」とあり註釈に「沙をはるにさまざまのかたちをなすゆゑ、ざれことのざれならん」と記述がなされ、サケが産卵のため砂を掘る行為とその状態を掘

り・ざれと土地の漁師は表現したというものです。

さきに書きましたとおり、ブラック・サーモン、ランセット・フィッシュユ、オンコリンカス、ブナ等々いづれもその状態から名称がつけられていることと照し合せ考えれば、ここにいうホリ・ザレが北陸地方から北海道に渡り定着される過程でホリ・ザレがホッチャレに転訛したのではないかと考えられるのですがいかがなものでしょうか。

北大の大石助教授は「コンブの本」の中で北海道のコンブは昔北陸経由で若狭小浜等に運ばれたとあり、北陸と北海道はこうしたルートで可成の交流があり北海道に漁業文化をもたらしたと考えられ、ブナと共にホッチャレの語も北海道に来たとしても不思議ではありません。

また北越雪譜にはサケの受精卵をカメに入れて漁の少い清流にこれを放せばサケが増えるだろうとも書かれてあり、今から一五〇年前に自然科学者でない著者が精確な現象把握によりこれを予見しててまさに達見であると感じさせられます。

厚岸の北大理学部附属臨海実験所に通じる下り山道の中間に大小二本のブナノキがあり、紅葉の時期には木肌の班紋が色づくものかどうか一度自分の目でたしかめたいと思っております。

(八月記)